

S. Ashina

**<前回>近代聖書学の成立とその諸原理**

1. 知・人間的現実の地平としての歴史（歴史化）→歴史主義・歴史的思惟

2. 近代的知・歴史主義に基づいたキリスト教思想（研究）＝近代聖書学の成立

「十八世紀の新しい解釈学をめぐる論は、革新論の事実上の優勢と、革新論者と敬虔派とが共に肯定し実践した聖書の歴史的・批判的考察でもって閉じられる」（206）、「純粹に学問的なテキスト解釈が、いかに教会に役立つし、害を与えもするかは、テルトゥリアヌス以来すでに明白である。」（207）

- ・19世紀「シュライアマハーの解釈学」「調停」

- ・シュトラウス(1808-1974)『イエスの生涯』(1835/36)

- ・バウル(1792-1860)とテュービンゲン学派

「積義が歴史的・批判的神学と理解されることを欲する限り、今日バウルとシュライエルマッハーより後退することはできないし、また許されもしない。」(224)

3. 近代歴史学の成立→近代的知の基礎学としての歴史学

言語学、法学、哲学、神学、地質学、生物学など

・「十八世紀のいずれかの時点で、ドイツの大学、とりわけゲッティンゲン大学において、今までの単なる考証学から新しい科学的な方向、つまり、証拠となる史料の批判的検討と、出来事の成行を物語風に再構成することとを結合させるような方向に向かっての歴史学科の移行が始まった。……歴史家にとって一つのパラダイムが出現してきた。そして、このパラダイムが、ごく最近まで大学において執筆される歴史叙述に影響を及ぼし続けてきたのである。」(イッガース、13)

・「歴史主義の解釈学的な方式は、社会主義批判にうってつけであった」(27)、「国家的な公文書から読みとれるような国民国家の歴史」(40)。

↓

民衆史、心性史（アナル学派）

土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史論』教文館、1987年。

4. トレルチ

「歴史的方法、歴史的思考法、歴史的感覚」「真の近代的歴史」

「第一は歴史批判にたいする原理的習熟であり、第二に類推の意味であり、第三はあらゆる歴史的出来事に生ずる連関がそれである。」(10)、「蓋然性の判断」(10)

「批判を始めて可能にする方法は、類推を適用すること」、「類推の全能とは、あらゆる歴史的出来事の原則的同質性を含むものである」、「聖書批評自体もまた諸伝承の類推によって成り立っている。」(11)、「歴史的生のあらゆる現象の相互作用」、「すべての出来事が恒常的な相互連関のなかにあり、全体も個体も互いに関連し一つの出来事が他のものと関係しつつ、必然的に潮流を形づくることになるのである」、「われわれ自身の追体験能力」(12)

5. パネンベルク

↓

方法論的現在中心主義＝歴史的思惟の解釈学的構造

制度的再帰性における歴史学・歴史研究

**6. 近代聖書学の諸帰結****(1) イエス研究をめぐって**

1. パネンベルク「聖書原理の危機」(1963年の講演)

「テキストの思想世界と現代の思想世界との隔たり」、「聖書の諸文書は矛盾なく内容的

に一致しているという意味での古い聖書正典(*der biblische Kanon*)の概念は、崩壊し去った。」(13)

「イエスの歴史と使徒たちのキリスト教使信との関連を視野から失ってしまった。」(14)

「事実と意味、史実とケリュグマ、イエスの歴史とそれに関する新約聖書の多様な証言、これらの間に断絶があることが現代の神学の問題状況の一方の面の特徴となっている。」(15)

「伝承された種々のテキストとわれわれが生きている現在との解釈学的差異は、その両者を結合する歴史を構想することによって保持されねばならず、かつまた止揚されねばならない」、「普遍史の問題」(19)、「包括的な歴史の神学の意味での神学の普遍性を更新するように押し迫ってくる。」(21)

## 2. 19世紀におけるイエス伝研究とその挫折 (A. シュヴァイツァーの総括)

### 懐疑主義

### 3. ブルトマン『イエス』(未来社)

「人間と歴史の関係は、自然との関係とは違ったものなのだ」、「客観的自然観察があるという意味での客観的歴史観察はありえない」(7)、「叙述はただ歴史との絶えざる対話でしかあり得ない。」(8)

「方法の主観性」(9)

「以下の叙述は、普通の意味での客観性を要求し得ないとしても、他の意味では大いに客観的なのである。それはつまり評価を与えることを断念している」、「以下の叙述には、イエスを偉人や天才や英雄にするような言い回しは全く欠けている。」(11)

「イエスの「人となり」に就いての興味も排除されている」(12)、「私個人としては、イエスは自分をメシアと考えなかったという意見である」、「それは結局のところ、この問題については確かな事は何も言えないからではなく、むしろこの問題は副次的な事柄だと思うからである。」(13)

「その意志したところは、実際、一連のまとまった命題や思想として、教説としてしか再現され得ない」、「このものは事実ただイエスの教説としてのみ捉えられ得るのである。」(14)

「思想というとき、それは時の中に生きている人間の具体的状況と切り離せないものとして理解されている。すなわちそれは、動きと不確実性と決断の中にある、自身の実存の解釈なのである。」(15)

「その「教説」、その宣教なのである」、「実際さしあたりは教団の宣教なのである」(16)、

「伝承の最古の層の中にある思想の複合体が私達の叙述の対象だからである。」(17)

## 4. 伝承史：イエス→断片的な口承伝承(弟子たち)→収集・文書化→編集

- ・現存のテキストから最古層へ遡及し再構成する。弟子集団＝共同体における伝承の法則性の確定→逆算(様式批判)
- ・編集者の意図の解明(編集批判)

## (2) イエスと癒し

### 5. <健康・病>問題群

Paul Tillich, *The Relation of Religion and Health* 1946,

in:Perry LeFevre(ed.), *The Meaning of Health. Essays in Existentialism, Psychoanalysis, and Religion*, Exploration Press 1984 pp.16-52

P. ティリッヒ 『宗教と心理学の対話 人間精神および健康の神学的意味』  
教文館、2009年。

In asking this question, we do not turn to the modern theological doctrines of salvation for an

answer. They have mostly lost the original power of the idea of salvation, its cosmic meaning which includes nature, man as a whole, and society. Especially in modern Protestantism, salvation, and many related concepts such as regeneration, redemption, eternal life, are interpreted as descriptions of the spiritual situation of the individual man, in which a special stress is laid on his moral transformation and the continuation of his personal life after death. But for biblical and early Christian thinking, salvation is basically a cosmic event: the *world* is saved. (16)

When salvation has cosmic significance, healing is not only included in it, but *salvation can be described as the act of "cosmic healing."*

Salvation is basically and essentially healing, the re-establishment of a whole that was broken, disrupted, disintegrated. (17)

*The cosmic disease is cosmic guilt.* (19)

The savior is the healer. Jesus calls himself a physician. The power of the salvation is based on their cosmic significance, that is, on the fact that they represent the whole which they are supposed to bring back to its lost wholeness. This implies that they are divine and cosmic figures, divine, implying centralized unity and indestructible control over themselves and things, cosmic, implying their all-embracing universality. Yet the saviors are also human, because in man the cosmic is united and "son of man," the god "anthropos," the "god-man," etc. (21)

6. *The Meaning of Health*, in: Paul Tillich. *Main Works 2*, de Gruyter 1990 pp.345-352

Healing, Separated and United

7. イエスの奇跡物語（治療奇跡）

イエスは病の治癒なしに、病の癒しを行ったとは言えないか？

奇跡テキストはいかに読まれるべきか → ふさわしい問いとは

8. <聖書学的に奇跡物語をどのように解釈するか>

- ・様式批判（ブルトマン）：イエス運動あるいはキリスト教共同体内部（+同時代のユダヤ教）

- ・編集批判から文学社会学（テキストと社会との相関関係・相互連関）  
大貫隆 『福音書と文学社会学』（岩波書店）

- ・新しい新約研究の動向：方法論の拡張

言語そのものへ：言語行為の諸機能、レトリックの理解

方法論の総合化（歴史的批判的方法を超えて）：

9. 悪霊に取りつかれたゲラサ人をいやす（マルコ）

5:1 一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。3 この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。4 これまでにも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は砕いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。5 彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。6 イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、7 大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」8 イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。9 そこで、イエスが、「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。10 そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。11 ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。12 汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。13 イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。14 豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのこ

とを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来た。15 彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。16 成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身に起こったことと豚のことを人々に語った。17 そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いだした。18 イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。19 イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」

#### 10. 新約聖書学の代表的議論から

1) 荒井 献 『問いかけるイエス 福音書をどう読み解くか』NHK出版、1994年。

「第一五講 「自分の家に帰りなさい」－「悪霊に取りつかれたゲラサ人」  
のいやし マルコ五・一―二〇」 190-202 頁

- ・ 奇跡物語の最古層、帰還命令→「癒やし」とは何か、その社会的次元
- ・ 荒井献の新約聖書学のポイントの一つ

『イエスのその時代』(岩波新書 1974年)

- ・ イエスにおける「民衆の視座」(民衆と共にあるイエスの振る舞い)と「相対化の視座」(神は相対化の視座として機能する)の明確化。「民衆と」「権力に」。
- ・ 奇跡物語伝承の様式史法則 → 「理念型」の再構成

2) Marcus J. Borg,

*Jesus in Contemporary Scholarship*, Trinity Press International 1994

*Conflict, Holiness and Politics in the Teaching of Jesus*, Trinity Press 1984

3) John Dominic Crossan:

*The Historical Jesus. The Life of a Mediterranean Jewish Peasant*, HarperSanFrancisco 1991  
13. Magic and Meal, pp.303-353

My wager is that magic and meal or miracle and table constitutes such a conjunction  
and that it is the heart of Jesus' program. (304)

*Jesus. A Revolutionary Biography*, HarperSanFrancisco 1995

(ジョン・ドミニク・クロッサン『イエス あるユダヤ人貧農の革命的生涯』  
新教出版社)

#### 11. ポイント → 医療人類学

- ・ 疾病(disease)：身体的、心的

基本的に特定の次元に限定

病(illness)：精神的・宗教的を含む全人格的態度、複数の次元が複合的に関与する

- ・ 奇跡は物理的現実である前に社会的現実である

癒しの社会的次元：関係性の回復という奇跡

和解のない世界、にもかかわらず

驚くべき出来事＝恩恵・贈与

#### <参考文献>

1. 波平恵美子『医療人類学入門』朝日選書。
2. エドガー・V・マックナイト『様式史とは何か』ヨルダン社。
3. ノーマン・ペリン『編集史とは何か』ヨルダン社。
4. ダニエル・パット『構造主義的聖書釈義と何か』ヨルダン社。